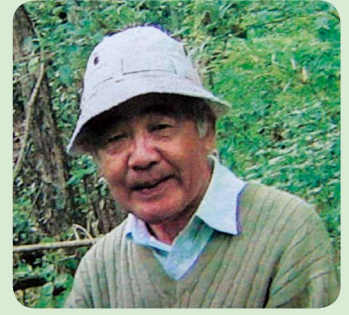


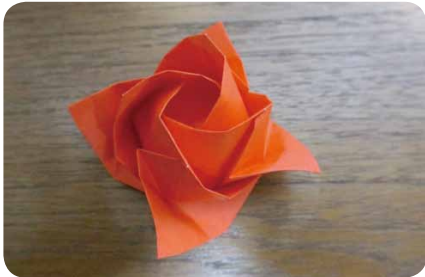
伊藤 國彦 「オリガミ」



昨年から今年にかけて、環境省はRDBの第4次見直し結果を公表しました。ほとんどの野生生物群で依然深刻な様相が進行しています。

果たして、日本の野生生物の多様性はどうなってしまうのでしょうか。

自然環境や野生生物の問題も益々重要度を増していますが、それと同調するかのように日本の文化や伝統、更には私たちの生活基盤、子供の遊びなどにも多くの問題が進行中だという指摘も後を絶たしません。



趣味は何ですか?と尋ねられ、「オリガミです。」と答えると、大

伊藤 國彦 氏

1945年生まれ

- ・岡山県立大学名誉教授
絶滅危惧種ウスイロヒョウモンモドキを中心に県内虫相を調査している
- ・日本鱗翅学会自然保護委員会
中国地区委員長
- ・公益財団法人おかやま環境ネットワーク評議員

抵の場合「???」変な顔をされます。何が面白いの?それが何の役にたつの?時間の無駄じゃないの?と言った声が聞こえそうです。

「オリガミ」は日本発の文化として世界でその良さが認められています。

1枚の紙を折るだけで、様々な生物や色々な物などに变化するさまは、生物の進化や事物の多様で複雑なバランスを表現しているように感じられます。

オリガミと言えば、スポーツ大会の応援や平和祭典などでお馴染みの「千羽鶴」を思い浮かべられると思いますが、その「千羽鶴」にも異変が起きています。

多くの日本人は、伝統的で代表的な作品である「折り鶴」を正確に折れたはずですが最近では状況が変わってしまいました。「折り鶴」でなく「折り鶴もどき」が支配的になっています。一見似ているのですが、折り手順を省略した作品が多く目に付きます。

「折り鶴」でさえ、手順が面倒なので、もっと楽に折る「効率化」が望まれたためだと想像できます。デジタル思想の反映だとも思いますが、すぐに役立たないものや、一見無駄に思える時間はなるべく省略したいとの想いかも知れません。

30年ほど前から折り紙を続けていますが、その良さは、手順の複雑さへの挑戦であり、自分なりの工夫を凝らすことへの魅力であり、伝統的文化と何時でも関わるとの思いなどです。時間の無駄と言われれば、これほどの無駄はありませんが、ほとんど1日中一枚の折り紙と格闘していることもあります。



慌しく、落ち着かない毎日ですが、もう少しゆとりと心の豊かさが実感できた嘗ての日本への憧れを求めて、続けていきたいと思っています。

写真は比較的最近の作品「折りバラ」「巻貝」とニール、イライアス氏の名作「ラストワルツ(1968年創作)」です。

